# 地域の課題を考えるプラットフォーム 公開勉強会
# 「〝みんな〟のロームシアター京都をめざして」
## 第2回 〝みんな〟の劇場って？ ― 劇場へのアクセシビリティを考える

**日程**：2020年3月8日（日）
**ゲスト**：鈴木一郎太（株式会社大と小とレフ 取締役）
吉野さつき（愛知大学文学部メディア芸術専攻 教授）
本橋仁（京都国立近代美術館 特定研究員）
**司会**：長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院 助教）
奥山理子（みずのき美術館 キュレーター）

### 【第1部 ゲストによる事例紹介】

**発表① 鈴木一郎太さん**（株式会社大と小とレフ 取締役）

鈴木：まずは自己紹介をします。20代をアーティストとしてロンドンで過ごし、2007年にイギリスから帰国しました。その後、レッツ（認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ、知的障害のある人の表現活動を中心に、障害や国籍、性差、年齢などあらゆる「ちがい」を乗り越えた表現活動を支援する団体）の久保田翠理事長と知り合い、レッツに在籍していました（2007～13年）。この経験がきっかけで、障害福祉と社会をつなぐ文化事業にも多く携わるようになりました。

現在は、建築家と立ち上げたソフト・ハードを扱う会社（株式会社大と小とレフ）に所属し、場合によっては他団体にも籍を置いて活動しています。例えば、［静岡県文化プログラム］のコーディネーター（2016年～）や、［NPO法人こえとこころとことばの部屋（ココルーム）］の理事も務めています。それから2020年の今年、「かけがわ茶エンナーレ」という芸術祭が行われるのですが、そのディレクターを（すごく向いていないと思うけど…）担当しています。

仕事を一言でいうと、やりたいことがある人に寄り添ってそのサポートをする仕事です。過去の仕事を振り返って思ったのは、自分のやりたいことをやった仕事はあまりないかもしれません。主体者の話を聞き、整理して形をつくることが多く、アウトプットはバラバラです。ゲストハウスの立ち上げに携わり、コンセプトづくりと内装、事業計画を手がけたこともあれば、鳥取県の「文化系ウェブマガジン「tottto（トット）」の立ち上げも手がけました。他には、東京都練馬区の障害者の学びに携わる団体と一緒に、文科省の実践研究事業（「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」）の予算を獲得し、事業推進を行なったこともあります。依頼主がやりたいことによってアウトプットは変わってくるのですが、彼らの思いを整理し、展望を見出す手助けをしているつもりです。

鈴木 一郎太氏

### 好きなプログラムの話
### 「こどもはなうたコンテスト」

鈴木：今ほど自分の活動を紹介しましたが、最近、自己紹介のときに「自分はこんなものが好きなんだ」と、自分が好きなプログラムの紹介をするのがいい気がして、試しています。別に自分は一切関わってないんです。ただ人づてに話を聞いたもので、ただただ好きな企画を、時間をかけて紹介したいという（笑）。

僕にとってのそれは「こどもはなうたコンテスト」。岐阜県の産廃業者さんが運営している子どものはなうたの公募コンテストです。2012年から2018年まで開催されていて、なぜか2019年は行われていないのですが。毎年コンテスト名が変わっていて（こども〝はなうた〟グランプリ、うちのこのどじまんなど）、そのあたりはブレブレらしいんですが、これがすごくいいんです。子どものはなうたを大人がスマホで録音して応募するだけ。グランプリ以外はだじゃれみたいな賞で「いい声で賞」みたいな感じです（笑）。審査員のひとりから音源をご提供いただいたので、聞いてみましょうか。

～音源を再生～

……ふふふ、いいでしょう？「チャイルドシート」とか「3D」とか、知っている言葉がちょっとだけ紛れ込んでいるのも面白いですね。さらに、受賞作はあいのてさん（NHK教育テレビ「あいのて」にレギュラー出演していた3人組。音楽家の野村誠さ

ん、片岡祐介さん、尾引浩志さんで構成）が曲をつけてくれるんです。曲がついたバージョンも聴いてみましょう。

～音源を再生～

……これも、いいでしょう？（笑）。

僕はこのコンテストを地元の産廃業者がやっているのがいいなあと思うのです。自分自身、4月から掛川に引っ越すので、昨日までおばあちゃんが一人で住んでいた家を片付けていたのですが、この企画を展開する会社は、亡くなった人の家を整理する仕事も請け負っているようで、そのことから、「人の思い出を扱って商売をしている」と捉えているのだと思います。このコンテストをするまでに二転三転あったのだろうと推測しますが、その中で、子どもがオリジナルの歌を歌う時期は限られていることに気づかれたと思うんです。子どもはすぐに「アンパンマン」の主題歌を歌い出したり、今年だったら「パプリカ」を唄いはじめるように、周りの環境にどんどん影響を受けていくから、オリジナルの歌を歌っている時期は実はとても短くて、豊かな時間なんですよね。そしてこの会社は、その豊かな時間を残す活動をＣＳＲとしてやっている。その軸の通し方がすごく好きなんです。と、どれも僕が勝手に推測しているだけなのですが…。とはいえ、いろんな物事を整理して事業をはじめるときに、ちゃんと軸が通っていれば、みんなが飽きてもきっと続くのではないだろうか？そういうことを割と気にしながら、仕事をしています。

## 「アクセシビリティ」って、分かりにくくないか？

鈴木：残りの時間は、今日の議論のための話題提供をしたいと思います。事前に関係者の皆さんとスカイプミーティングをした時にあらためて思ったのですが、自分はあまり「アクセシビリティ」について考えたことがなかったなと。場所をひらいたり、人が来るイベントはいろいろ企画してきたものの、不特定多数の大人数を受け入れる場所の運営をあまり手がけたことがないのが理由かもしれません。そんな僕の疑問は、そもそも「アクセシビリティ」という言葉自体がすごくわかりづらくないか？ということなんです。Ｗｉｋｉｐｅｄｉａによると、日本語訳は「利用しやすさ」とか「利用しやすくする」になるそうで、国立国語研究所という機関がこの意味を根付かせようとしているそうです。意味がわかったところで、「やっぱり言葉が全然、利用しやすくないな」と思うんです。「アクセシビリティ」という言葉を使うことで、見えなくなってしまうたくさんの事柄があるような気がしています。

事前の打ち合わせで、観客の対象を「障害のある人」に広げたいとお聞きしましたが、障害区分は一切設定してないそうですね。でも、それぞれかなり特性が違うわけですよ。一番一般的なアクセシビリティの改善はバリアフリーだと思うけど、そんなハード面の話をしたいわけでないとはよくわかっていて、今日みなさんが扱いたい話はもしかしたら「心持ちの話ではないのか？」と思っています。「劇場は、自分たちが行ってもいい場所ではない」と思っている人たちに対して、「劇場を体験してもらうために自分たちは何かできるだろうか？」という悩みと考えを積み重ねていくことかもしれないなあ、と。

僕も正解はわからないのですが、ひとつ言えるのは、デイケアに通っている高齢者の人、福祉施設に通っている障害のある人、子どもたちには、必ず保護者のような立場の人たちがいる。子どもが行く場所を決めているのは親であったり、施設の利用者の活動を決めているのは支援員だったりする。その人たちへの働きかけが必要かもしれません。もちろん彼らも本人の意向を聞いているでしょうし、障害のある人なら「おでかけ支援」を活用すれば自分の行きたいところへ連れていってもらうこともできる。でも、障害のある人が集団で動く場合は、「本人が本当に行きたいところへ行けない」という状況も出てくるわけです。

一方、先ほど「心持ち」という言葉を使ったのは、もしかするとロームシアター京都の職員さんの中には、「業務が役割」と思っている人が多いのではないか。例えば、駐車場のおじさんはもしかしたら委託の方かもしれませんが、彼らに「自分はロームシアター京都の一翼を担っている」という意識があるかどうかが大切だと思うのです。意識がないから悪いのではなくて、「もし意識があったら、ちょっと違うことが起こるのではないか？」という可能性の話です。意識づけは強要できないので難しいのですが、そういう時にこそ、ワークショップという手法が活用できないでしょうか。なんらかの体験を通して潜在意識にアプローチすることで、自然と向き合う姿勢が変わることもあります。

例えば、駐車場の管理者ミーティングのときに、簡単なワークショップをしてもいい。スタッフ一人ひとりの心持ちを変えることで、たとえ作品鑑賞をしなかったとしても、劇場に多様な人たちが来る意味が生まれるかもしれない。これは単純に「ホスピタリティの質を上げる」ことでもない気がしています。一人ひとりが自分でできる範囲で行なっていくような、草の根の動きかもしれません。以前、植物園のボランティアガイドをするおじさんと話した時、話を聞いている最中、腰につけたポシェットから植物説明用の小道具が出てきて、本当に面白かった。双葉みたいな茶色い種を取り出して、「これが何だかわかる？」「双葉みたいなところが風の影響を多く受けて、くるくる回るんだ。だから、滞空時間が長くなって、遠くに飛んでいけるんだ！」みたいなことを、どんどんどんどん話していく。「なんだこの人は？」と思ってさらに聞いたら、元はアパレル業界にいた経歴もあり、さらに話が深い。こういう人が一人いるだけで、その場所の印象って変わるんだと思うのです。

## 面白いと思った話を共有します

鈴木：話題提供の延長で、最近面白いと感じた話を4つ共有して終わりたいと思います。1つ目は、宮崎の愛甲さんの話。宮崎に行った目的は、障害のある人の芸術作品の製作、展示方法を考えるためでした。障害のある人の芸術活動を支援する施設「アートステーションどんこや」に呼んでもらったのですが、その担当だったのが愛甲さんです。20代後半の男性で、大学では、アートでも、福祉でもない専攻だったようですが、現在は障害福祉施設の職員として働いています。この方は大変なお酒好きで、仕事とは関係なしに、電動車椅子に乗った脳性まひの利用者さんと時々飲みに出かけることをライフワークにしてい

るそうです。それも、あえて予約を取らずに行くのだとか。扉を空けて「彼も入れますかね？」と声をかけると、大抵みんなが協力して場所を空けてくれるそうです。もしこれを3人以上でやると、ゲリラっぽいというか、声高な社会運動っぽい雰囲気が出ちゃうと思うんです。最小単位の2人というのが非常にいいと思います。彼もグループでは行かないと言っていますし、数の論理で場に対してマウントをとるのではなく、2人という最小単位で、休みの日にただただ出かけている。とても気持ちのいい話だと思いました。

2つ目は、宮崎のリサーチで見かけた、日向市の障害者施設「風舎つるまち」の若い2人の女性スタッフの話です。お昼の給食を食べ終わると、その2人が利用者さんと一緒にパソコンを開いて「今日はどれにする？」みたいな感じで、YouTubeから曲を選んで流し出すんです。するとノリのいい曲が流れ出して、そのスタッフさん2人だけが、体を動かし始めるんです。簡単なエクササイズの時間ということらしいのですが、一緒に曲を選んだ利用者さんの方は、映像に興味があるだけのようなので参加はしません。そのうち2人が「痩せたい人ー！」って突然みんなに声をかけるのですが、「エクササイズの時間です！」とは言わない、ピンポイントの投げかけ方がよいなあと思うんです。なかなかできない芸当です。例えば太った利用者さんがいたとして、お医者さんから運動しなさいと言われていたとしても、本人にその意思がなければやらなければいいし、日によって動きたい日があれば動いて、そうでなければ動かなくてもいい。「痩せたい人ー！」という呼びかけは、小さなエクササイズの場を開くには、とても効果的な投げかけだと思いました。

3つ目は練馬での話です。先ほど少し話した文科省事業を一緒にやった組織は「NPO法人 障がい児・者の学びを保障する会」というところなのですが、今年、ここで一般向けのオープン講座を開いて、障害のある人も一般の親子も参加できるプログラムを考えました。この時、オープン講座の開き方を整理してみたら、ざっくり4パターンほどありました。

**①「面白そうをきっかけにする」**

主催者が面白そうだと感じるプログラムを提供しましょう。

**②「他のイベントにのっかる」**

例えば、地元のマルシェイベントにのっかってイベントを行えば、自分たちのネットワークだけでは出会えない人々と混ざりあったり、新しいグループ層に自分たちのアイデアを共有することができる。

**③「他の団体と共同してプログラムをつくる」**

相手の都合もプログラムに反映させることは簡単ではないが、対等に作っていくことで得られることもある。

**④「立場を替えてプログラムに関わってみる」**

ここで話したいのは特に④です。学びというと一斉教授型をイメージしがちですが、僕らが大人になってから学ぶ場所は座学よりも飲み会や、こういう小さな仕事のグループの場で学ぶことが多いと思う。つまり、普段の生活の場、コミュニケーションの場で、教えたり、教えあったりすることが断然多いんです。にも関わらず、障害のある人たちが、ただ学びを受け取る側に固定されているのは不自然ではないだろうか？ 彼らが教える側に立つことで、見えることがたくさんあると思う。

僕らだってプレゼン資料をまとめることで、普段の自分の考えを整理することができるように、自分の考えを口に出したり、想いを整理することも大切だと思うんです。例えばささいな恋愛話でもいい。具体的なアドバイスがほしいわけではないけれど（変に口出しされるとムカつくのですが（笑）、口に出してみたことであらためて気づけることがある。こんな風に立場を変えるプログラムを行うことで、得るものをひらいていくことができるかなと思っています。

最後は、浜町市にある社会福祉法人「ひかりの園」で毎年行っているワークショップシリーズについて。今年で4年目になります。このワークショップには作業療法士、ダンサー、演劇、音楽のジャンルから4人のゲストを招いています。今年は2つの会場で2回ずつ実施しました。ひとつは町の中心部にある「浜松市福祉交流センター」という公共施設で、もうひとつは法人内の高齢者施設「第三静光園」のイベントホールでした。参加者の年齢を細かくチェックできたわけではないのですが、公共施設では10歳～63歳の方が参加され、高齢者施設では、なんと0歳～92歳の方が参加され、予想以上の年齢の幅が生まれました。内訳は入所の障害のある人もいれば、施設へ通う高齢者もいて、職員の親子もいれば、外部からやってきた家族連れもいました。

**［質疑応答］**

奥山：本質的なところをシェアいただき、興味深いと思いながらお聞きしていました。練馬の事例では、課題を考えたり、心持ちをひらいていくときに、いくつかのフレームワークに沿ってアプローチをすると、参加者の反応や状況がこう変わるということを整理くださっていて、とても参考になりました。一方で、イベントとして企画をすれば参加者の反応がダイレクトに受け取れる良さがある一方、今日鈴木さんが軸に話してくださったことは、単発のイベントよりも「日常の関係性が大切」という指摘だったと思うんです。鈴木さんは、日常の関係性づくりについて意識してフィードバックをしたり、観察されていることはおありでしょうか？

鈴木：実は僕の普段の暮らしは、そんなオープンな感じではないんです。マンガ喫茶に常に行きたいと思っているような暮らし方をしていて、できれば閉じたいと思っているタイプです（笑）。ひらき続けていることって、とても疲れるじゃないですか。自分が根明か根暗かはどっちでもよくて、「どれくらい自分がひらいたときに、どれくらい自分に負荷がかかるのか？」を意識しています。仕事だから、いくらでもひらくことはできるのですが、つぶれたら意味がないと思うんです。僕の普段の日常では、自分の振れ幅ややわらかさ、ひらくのに必要な部分はどれくらいあるのか、ということを気にしているような気がします。

奥山：先ほど「受け取る人の反応を強要しない」というお話があったのですが、きっとそういう想いが反映されているところ

があるのでしょうね。他の質問はディスカッションでお話できれば幸いです。ありがとうございました。

長津：前回、「こういう文化施設は、顔が見えるようになるといいよね」という話が出ましたが、スタッフの一人ひとりの個性や特性でやっていくことが大切だとあらためて思いました。一方で「無理しない」ことが大切で、担当者のキャパシティの中で展開されるべきだと思うんです。例えば、「あの人がいなくなったからこの企画はなくなったけど、新しくこれが加わったんだな！」みたいな受け入れ方がされるといいなと思いました。「自分がひらくことでかかる負荷」という話がありましたが、ロームシアター京都ではこの主語が「劇場」に変わると思うので、劇場のキャパシティを見極めることも大切だと思いました。

## 発表② 吉野さつきさん（愛知大学文学部メディア芸術専攻 教授）

### 家庭の中でできる表現活動を考える

吉野：私も実は、はなうたグランプリが大好きなのです。予定していませんでしたが、この話から始めたいと思います。私の大学の学生が昨年末に、「はなうたグランプリ」の事例を彼女なりに分析をして卒論を書いたんです。これが、なかなか面白いんです。例えば「この作品には〝シンデレラ〟というタイトルがつけられており、シンデレラという単語から言葉遊びが始まる。シンデレラの発音に似たリズムの言葉が紡がれ…、中には似たような音のサンダルという言葉も実在する…」みたいに、こと細かく分析されているんです（笑）。他にも、先ほど鈴木さんが紹介された前年のグランプリ作品「うしさん」にも触れています。

鈴木：あ、「うしさん」の作者と、僕が先ほど紹介した2つのグランプリ作品は同じ子どもなんです。審査員は応募者名を知らずに、録音だけを聞いて審査をしているのですが、さすがに3年連続なので、この方は殿堂入りされました（笑）。

吉野：私もこれが大好きで、CDも買って持っているんです（笑）。

この学生がなぜ、卒論ではなうたの事例で発表したかというと、この学生は大学2年生のときにお付き合いしていた彼との間に子どもができ、2年間休学して籍を入れ、子どもを産み、子育てが一段落してから復学した学生なんです。この春めでたく卒業し、近隣の市の文化財団に就職をし、皆さんと同じような仕事に関わっていきます。その彼女は、現在は3歳になった子どもを育てながらパートもして、がんばっている状況です。大学に復学しようとしたときは保育園に入れなくて、無認可保育園に入れて復学したのですが、いっとき話題に上った「保育園落ちた日本死ね」と言った母親の気持ちがよく分かると言っていました。その彼女が、そういう状況で子育てを始めて気づいたのは、美術館や劇場の親子向けプログラムが増えているけれど、そもそも子どもが小さすぎたり、移動が大変だとかいろいろな問題があって「なかなか連れて行けない」という現実でした。

吉野 さつき氏

たまたま自分にも子どもにも障害はないけれど、もしあったら、もっと連れていけないだろうなと。「興味があるコンテンツが提供されていても、アクセスできない」という状況が起きている。それで彼女は卒論の中で、家の中の子どもがやっている表現をアートだと考えて観察する「おうちアート」という概念を提唱しました。いろんな過去の前例を参照する一方で、自身の子どもの観察日記と分析も添えています。子どもが毎日、いろんな場所にミニカーなどを並べる様子を観察して、写真に撮影し、「なぜ並べたのか」を子どもを作家に見立てているんです。これが、めちゃくちゃ面白いんです。時々親バカも入っているので、論文としてはどうかという部分もありますが（笑）。

この学生の素晴らしいところは、「文化施設に連れていけない」という状況の中で、新しい概念を提唱して、家の中でのアートを発見しようという視点に変えていったところだと思うんです。そのヒントを探す中で、ネット経由で応募できる「こどもはなうたグランプリ」を見つけたというわけです。他にも、最終的に事例には使わなかったのですが、鈴木さんも関わっていた「おべんとう画用紙」という浜松の根洗学園（註：発達にゆっくりさがみられる幼児期の子どもの療育施設）で考案された親子対象のプログラム（註：子どもが描いた絵を鑑賞した親がお弁当で再現をするもの）も調べていました。彼女が論文で語っていたのは、自宅における表現活動のアイデア、特に子どもの発達や教育寄りではなくアートとして見るという視点を主とするものについての情報が非常に少ないという現実で、まとめでは「もっと活動が広く発信されることを願う」と書いていました。

### 耳の聴こえないジェニー・シーレイさんのワークショップ

吉野：最初に私の学生の紹介をしたのは、鈴木さんの話を受けて、というのもありますが、「〝みんな〟の劇場」とテーマを掲げた時に、自然と子育て中のお母さんの話も入ってくると思ったので、前置きとしてご紹介しました。

さて、今回の「〝みんな〟の劇場」という勉強会のタイトルについてです。「みんな」って、そもそも一体誰のことなのでしょうか？ 行政ではよく「市民のみなさん」と呼びかけますが、「市民」はどこまで含んでいるのでしょうか？ 私が住んでいる豊橋市はトヨタのお膝元なので、元々は工場などで働く日系ブラジル人の住民がとても多い街。最近はフィリピンやベトナム、中国人も増えています。この人たちも市民に含めているのでしょうか？ 今日はまず「私たちは誰と向きあおうとしているのか？」を問いかけたいと思います。

このことを考える事例として、私が理事を務める［穂の国とよはし芸術劇場ＰＬＡＴ］で２０１８年に、耳の聴こえないイギリス人演出家のジェニー・シーレイさんと行ったワークショップをご紹介します。ジェニーさんは、２０１２年のロンドン・パラリンピックの開会式の共同演出を手がけた方で、私は彼女とロンドンで出会って以来、17年来の友人です。彼女はロンドンの［グレイアイ・シアター・カンパニー］という劇団の芸術監督でもあります。この劇団では出演するほぼすべての俳優が、身体の障害がある方たちで、スタッフにもそうした方が多くいます。例えば照明デザイナーが車椅子利用者だったりと、常に制作現場にいろんな立場の人が混ざっています。日本でのオリンピック・パラリンピックが決まったことが契機になって、ジェニーさんは頻繁に日本に呼ばれるようになりました。それ以前は、エイブル・アート・ジャパン（障害のある人の芸術活動を支援するＮＰＯ）に招聘されて来日していましたが、２０１１年を最後にしばらく途絶えていました。せっかく彼女がまた日本に来るようになったので、ぜひ豊橋の人々にも彼女の舞台を体験してほしいと考え、劇場に声をかけてジェニーのワークショップを開催してもらいました。今から、この時の様子を劇場がまとめた3分ほどの動画をご覧いただきます。

～動画視聴～

動画の中で彼女は、合計9時間を割いてシェークスピアの戯曲『テンペスト』を元に、参加者たちと一緒に新しい劇を創作したと話しています。もちろんこの短い時間では作品としてはまだ散らかった状態で、洗練されてもいないけれど、目の見えない人、耳が聞こえない人、その他の障害がある人にどんな演劇体験をしてもらうのがいいのか、集まった人々で共に考えること、取り組むことが大切だと話しています。それは単に手話通訳がいればいい、というような話ではなく、「アクセシビリティとは、関わる人たちの姿勢の話だ」とも話しています。先ほどの鈴木さんの話と、まさに重なりますよね。

このワークショップは２０１８年10月に開催したのですが、いろんな方が参加できるように単発の1日だけのワークショップと、1日3時間ずつ、3日間をかけて行うワークショップと小さな発表会、ジェニーさんの講演をセットにした2パターンを用意しました。参加者の内訳は、豊橋近隣の障害のある人、ない人、それから大阪から毎日新幹線で通ってくれた障害のある人もいらっしゃいました。普段は大阪のビッグ・アイ（国際障害者交流センター）などで活動をされている方が、「なかなか周りにこういうワークショップがないから」とのことでわざわざ通ってくださったりもしました。そのほか、近隣の福祉、医療、教育関係者たちと、アマチュアを含め舞台芸術活動をしている人、俳優の平田満さんも参加してくださいました。平田さんは豊橋出身でＰＬＡＴの芸術文化アドバイザーを長く務めてくださって（現在は、ＰＬＡＴのアソシエイト・アーティスト）、この企画を事前に伝えていたところ、予定を空けて3日間全てご参加くださいました。

他にも、私が劇場のオープン初年度から関わり続けている人材育成事業で「ワークショップファシリテーター養成講座」というものがあり、私は企画の立ち上げを手がけ、現在も講師を務めているのですが、この講座を修了し、ファシリテーターとして活躍し始めている人たちも参加してくれました。ちなみにこの養成講座は、地域の人が小学校などで行うワークショップに関われるように人材育成を行うための企画です。通常は演劇中心の講座ですが、過去には2年間ほど音楽ワークショップの講座も行い、音楽家の野村誠さんに関わっていただきました。うちの学生も参加しています。

ジェニーさんのワークショップには、毎年ＰＬＡＴで行っている市民劇（今年は3月7日、8日で開催）のメンバーも参加してくれました。つまりこのワークショップは、この劇場が誕生してからいろいろな形でつながりを作ってきた地域の人たちと、今まではつなぎきれていなかった障がいのある人たちをつなぐ新しい機会となったのです。

## 劇場の姿勢を変えていくためには？

吉野：先ほどジェニーさんが語ったメッセージから、印象的なものをピックアップします。

ひとつめは「私たちは何者で、また一緒に取り組む相手はどういう人なのか？」。私たちが企画を行う時、「みんな」の中にどのような人が含まれているかを考えて、どうやったらその人たちに情報を届けられるかを考えますよね。この後にお話をされる本橋仁さんは目の見えない人向けの企画をされているそうですが、その時の主な告知方法は、点字と音読のどちらがいいか？ をしっかり考えていらっしゃると思うのです。

それから「企画に参加するかどうか」の決定権がある人たちも意識しなくてはなりません。保護者や施設の人たちの興味や予定が影響を及ぼすなら、その人たちに「どのように情報を届けるか」を考えていくことも大切です。「みんな」の中に、どんな人がいるか具体的に考えないと、その先が続かないと思います。

ジェニーさんのメッセージをもうひとつ紹介します。「アクセスとは単純に手話通訳者がいればいいということではありません。アクセスしやすい劇場をつくったところで、そこで働いている人が、「目の見えないはお断り」、「耳の聞こえない人が来たら困る」そんなことでは、私たち障害者はその劇場には行きません。アクセスとは、向き合う姿勢を変えていくことなのです」。私が話す前に鈴木さんの話に出ていたことですが、劇場の姿勢をどのように変えていくかも大切なのです。どうやったら、その人たちが来たくなる劇場になるのか？ ぼんやり「みんなの」と考えるのではなく、あんな人やこんな人…というターゲット像を具体的に想定することで、初めて彼らの具体的なニーズが分かってくると思います。

そして、この議論のもっと手前に、「そもそもロームシアター京都は、どんな人たちと向き合いたいのか？」という根本的な議論が必要だと思います。この問いの主語はロームシアター京都に限らなくて、何かを企画したり、コーディネートする立場の「私」が、どんな人たちに向き合いたいのか？ そのために必要なアクセス（そのためにとるべき姿勢の話）は何か？ という個人への問いにもなります。鈴木さんの「アクセスという言葉がわかりにくい」という気持ちも良くわかります。イギリスでは普通に使われていたんですよね。私が昔、ロンドンの大学院修士課程でアートマネジメントを勉強していた時、授業の中で、初めてそういう意味でのアクセシビリティを教わりました。どうやって駅から目的地に行くかもアクセスだけれども、劇場でやっている作品に「ポスト・パフォーマンストーク」があることもアクセスだし、障害のある人がどうやったら鑑賞を楽しめるか（日本では近年「鑑賞支援」ともいいますが）を考えることもアクセスだと。当時その話を聞いて私は、アクセスを日本語に置き換えた時に近しいのは、「ひらいていく」「つながりやすくする」かなって思いました。

そろそろ時間ですね。あまりまとまった話ではありませんでしたが、話題提供としてお話しさせていただきました。もし後ほど時間があれば、「みんな」の定義を障害のある人に限定しない場合の取り組みとして、昨年秋に行った鳥取の事例も紹介したいと思います。ありがとうございました。

**［質疑応答］**

奥山：吉野さんはＰＬＡＴの理事でいらっしゃるとのことで、開館以来、意識的に「ひらかれる」意味でのアクセシビリティに関する企画を多く手がけてこられました。長く続けてこられたことで、劇場の職員さんたちにも、何か意識の変化があったとお感じになられていますか？

吉野：ありますね！ 開館直後は、障害のある人を特に意識して企画していたわけでないんです。最近になって徐々に増えてきた、というのがＰＬＡＴの状況です。２０１２年にジェニーがパラリンピック開会式を担当し、一度途切れていた縁がもう一度繋がり始めて「豊橋にも呼ぼう」となった頃がちょうど、社会的な背景もあって、劇場がそういうところに意識を向け始めた時期と重なったのです。劇場で招聘する前に、私が大学のレクチャーにジェニーさんを招いたこともありましたし、他にも、耳の聴こえないダンサー南村千里さんを私が授業に呼んでいたので、彼女たちを劇場に紹介することがスムーズにいきました。ちょうど、いろんな社会的背景とつながって、実現できたことだと思います。ＰＬＡＴで南村さんのレクチャーを企画した時、今まで劇場に来られたことがない方から、たくさんお電話で問い合わせがきて、小さな会議室の席があっという間にうまったことがありました。さらにこの講演会によって、豊橋市の手話通訳さんとの縁が生まれ、さらにその方が社会福祉協議会さんとの縁が深い方で、そこから社協さんとのつながりも生まれました。こうしたことが重なり、「ちょっとずつでもいいから、自分たちでやってみよう」という機運になったんです。

一度やってみると、劇場でインクルーシブなイベントを実施するのに、どんなサポートが必要なのかがわかるようになる。それがちょっとずつ積み重なって、スタッフたちの自信になるのです。今年の市民劇では、市民劇としては初めて客席用にタブレット端末を導入するそうです。他にもＰＬＡＴでは、ブリティッシュ・カウンシルさんが積極的に実施されている「シェイプ・アーツ」（障害のある人々の文化へのアクセス向上に取り組む英国の芸術団体）による、インクルーシブな事業企画や運営を考えるワークショップを実施しました。さらに、ＴＡ－ｎｅｔ（ターネット、＊特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク）さんが開催されている「舞台手話通訳養成講座」も昨年からスタートしています。開館時から「ファシリテーター養成講座」を実施しているような劇場だったので、こうした新しい取り組みもしっかりと筋が通って、受け入れられているのだと思います。

## 発表③ 本橋仁さん（京都国立近代美術館 特定研究員）

本橋：前半では、当館が２０１７年から行なってきた『感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業』（障害の有無に関わらない、ユニバーサルな美術鑑賞のあり方を考えるプロジェクト）についてご紹介します。僕自身は展覧会担当のキュレーターであり、同時に館のエデュケーション部門に関わっているという立場です。『感覚をひらく』のプロジェクトは自分の他に松山、牧口という担当者がいますが、３人それぞれの関わり方が異なっています。後半は、僕自身がどういうモチベーションでこの企画に関わっているかを、自分自身の他の活動も含めて紹介したいと思います。このことについて話すことが、アクセシビリティの課題を考える話題提供になるのではないかと考えています。よろしくお願いします。

### 『感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業』について

本橋：『感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業（以下、感覚をひらく）』の活動を紹介するためのリーフレットを、これまでの活動を一度振り返る意味もあり、1年ほど前に制作しました。これを読んでいただくと、僕たちの活動のスタンスがお分かりいただけると思います。このリーフレットは、巻物のように少しずつ広げて読んでいただく仕掛けになっています。最初のページをめくると「1人：感じる」とあり、次のページをめくると「10人：気づき合う」とあり、その次が「100人：深める」、最後が「１０００人：広める」と続きます。つまり、これまで当館が関わってきた人数の単位（と変遷）を通して、活動経緯がわかる仕掛けになっているのです。また、表紙を見ていただくと「あなたは何人目です」と書いてあるのですが、これは一つひとつ手書きです。僕の手持ちのものは759人目と書いてありますが、今日お配りしているものはすべて異なります。人によっては、３５４８人目と書いておられる方もいますね。

『感覚をひらく』の活動はよく、〝（主に）目の見えない人のための美術鑑賞〟と紹介するのですが、僕個人としては、見える・見えない、聞こえる・聞こえない、障害者・健常者の問題ではなく、美術鑑賞における「ひとつの個性との向き合い方」と捉えています。あくまで目的は「新たな美術鑑賞プログラムの創造」であって、その方法論のひとつとして、例えば「目の見えない人と一緒にやるならどうするか？」を考えているのです。すると、目の見えない人は、そもそも「見る」という前提が崩れるので、例えばさわること、語ることで翻訳（補完）していこうと考えてみる。（翻訳という）新しいステップを設けることで、そこに自然といろんな人たちとの関わりが生まれてくる…という、こんな形のフレームワークで考えています。

このリーフレットをめくっていった最後に書いてあるのですが、言葉でいうと、僕たちはこの活動をバリアフリーではなくて「ユニバーサルの問題」として捉えて進めています。この活動は単発のイベントベースで始めたので、トライアンドエラーを反映しやすいんです。毎回実施した内容のフィードバックを行い、次の企画に反映していくということ自体を活動目的にしています。テストとしてやっているところがあるので、実際に盛り上がらなかった企画もあります（笑）。そういう企画はどんどんやめていってもよくて、残ったものをブラッシュアップしながら日々進化させるという方法をとっています。

その中で、僕がベースを作り、定番となった企画に『美術館ってどんな音 つくって鳴らそう建築楽器』というワークショップがあります。美術館は通常は作品鑑賞をする場所なのですが、それ以外の新しい鑑賞法を提案したいと思い、自分が専門とする建築をテーマにしました。京都国立近代美術館の建物は1986年に建築家の槇文彦氏が設計したものですが、これまではあまり建物自体を振り返られることがなかったんですね。それで「例えば、目の見えない人と建築を楽しむにはどうしたらいいか？」を考えて作ったプログラムです。

参加者の方に、ご覧のような木琴で使うようなバチを渡して、美術館をあちこち叩いてもらって音を聞く企画です。うちの建物は鉄骨造で、そこに主に花崗岩という石、アルミニウム、ガラス、大理石を組み合わせて設計されています。各素材は、取り付け方によっても音が変わります。素材の違い、材料の組み立て方…と言葉にするとかなりマニアックなのですが、これを叩くことで体感しましょう、もっとシンプルに楽しみましょう、叩くことで美術館建築を鑑賞しましょうという提案です。

2年前に一度実施して、映像をインターネットにアップしたところ、東京の盲学校が京都に修学旅行に来られる際に「ぜひ、やってほしい」とリクエストいただき、今年度2回目を開催しました。とはいえ、わざわざ東京から来ていただいて、うちの美術館に閉じこもっているのはもったいないと思って、ロームシアター京都にも相談し、みんなで棒を持って叩きに伺いました。その際は、ロームシアター京都の宮崎刀史紀さんに協力いただきまして、床もごろごろと叩いてみたりしています。普段、目の見えない人は白杖で地面を叩いて判断されているので、音にはかなり親近感があるそうです。この日はホールにも入れていただき、あちこち叩かせていただき、楽しませていただきました。

本橋 仁氏

## 教材「さわるコレクション」を作った理由

本橋：『感覚をひらく』プログラムは2017年から始まったのですが、僕はちょうどその年に当館に就職し、企画を任されました。1年目の自分に任されたもうひとつの仕事に、目の見えない人向けの新しい館のパンフレット作りもありました。この企画は僕が所属する前に実施が決まっていたのですが、当初の計画は「既存のパンフレットを点訳する」という内容でした。ただ、僕はそれでは意味がないなあと思ったんです。現在ある資料は、あくまで目の見える人のために作ったものに過ぎませんから。今でこそ当館はインクルーシブな活動を始めていますが、あくまでイベントベースで行なっていて、常に目の見えない人に対してプログラムを提供できる環境ではないんです。であるならば、目の見えない人が当館に来られた時に、当館も含めて、岡崎地域全体を楽しむガイドにしたいと思いました。

当館なら「こんな椅子に座ってみよう」とか、あんなことをしてみようと提案したり、近くには動物園やロームシアター京都もあるから、足をのばしてみようという風に。そんなことを加えて、目の見えない当事者の方と相談しながら、新たに自分で書き下ろして点字パンフレットを制作しました。このときに僕が考えたコンセプトは、「目の見えない当事者の方たちへのお手紙」として位置付けることでした。先ほどの鈴木さんのお話にもありましたが、目の見えない人にとって現在の美術館は「行っていい場所」という認識がされていません。だから、「この美術館がひらいているよ」ということを伝えて、PRするためのお手紙だと思って作りました。

また、こうした考えが反映された企画として、『さわるコレクション』という冊子も制作しています。この企画は美術館のコレクションから毎年3作品を選んで、「さわれる図」をつくっているものです。紙製ファイル式になっていて、ファイルの中には展示作品の点字解説と、さわる図が入っています。決して一部のこの作品で美術鑑賞が完結するとは思っていません。これによって美術館に来たいなと思ってもらうための手紙だと思っています。（註：教材は、各作品に描かれている内容、陶芸作品などの形をさわって知ることができる「さわるシート」と、図

だけでは表せない作品の色や技法、あるいは制作背景などを記した「文字情報」の2つで構成。「さわるシート」は、各作品の特徴を表現するために適した紙と印刷技術（例えばエンボス加工など）を検討し、いずれも異なる印刷の手触りになっていることも特徴。鑑賞を助ける人のために、点字シートと同じ内容が拡大文字でも記されている）。

## 自分自身の活動のモチベーションについて

本橋：最後に僕の活動のモチベーションについてお話できればと思います。誤解のあるように取られてしまうかもしれないのですが、僕自身には、「目の見えない人にこうしてあげたい」というような福祉的なモチベーションはあまりありません。あくまで、「今美術館に来ていない人に来てもらうには、どうしたらいいか？」という気持ちで活動をしています。

そういう視点（多くの人に美術館に来てもらう）とか、新しい鑑賞法を考えるという視点は、僕の専門である建築に関する個人活動においても同じなんです。世に建築ファンは多いけれど、その鑑賞法はとてもマニアックな世界にとどまっている感じがしています。年齢層も高いですし、彼らの見方は歴史的な情報を知ることに寄りがちです。それをなんとか変えたいと思った僕は、「建築の中で演劇をする」という視点で、黒田瑞仁さん、渡辺瑞帆さん、また舞台表現のための集団ゲッコーパレードと一緒に『家を渉る劇』というプロジェクトを実施しています。建築鑑賞というと「○○が設計した△△様式の建物です」というインフォメーションを勉強するのが常になっていますが、僕はそれに捉われない「空間体験」にしたいと思ったのです。国内にはたくさんの文化財建築があるので、それらと交渉をして建物の中で演劇をさせてもらっています。

この写真は、小説家の里見弴（とん）の旧邸をお借りして、演劇を行ったときのものです。こちらの写真は、早稲田大学の演劇博物館に呼んでもらって上演したときのものです。建物全体を使うので「移動式演劇」という形式をとっています。各回10人くらいしか入れないので、1日3公演に限定して行いました。他には、仙台の納豆工場で上演したこともあります。

この企画のベースにある考えは、演劇ファンのクラスターと建築ファンのクラスターを交換させたら、より幅広い客層にアプローチできて、かつ新しい視点で建築鑑賞を楽しめるのではないか？というものです。基本的には「多くの人に、もっともっと建築に興味をもってもらいたい」というモチベーションで活動しています。

それからもう一つ、「全国の郷土資料館の今後をどうするか？」という研究を個人的に行っています。各地の郷土資料館は古い文化財建造物を改修して歴史資料館にしていることが多く、観光振興のためにある時代に一斉に作られました。実は全国に7000館あるのですが、現在はものすごい勢いで数が減っています。資料の散逸の問題もありますし、廃屋状態になっている建物もたくさんあります。「この建物を保存、活用するにはどうしたらいいのか？」を考えるために、こつこつ一人で活動しています（笑）。

この活動で今、定期的に通っているのが高知県馬路村。「ごっくん馬路村」というゆずジュースでも有名な村です。こちらの郷土資料館は10年間閉まったままなのです。この村には地域おこし協力隊に所属する若者が10名ほどいて、彼らが僕を見つけてくれて「ここを何とかしたい」と連絡をくれました。郷土資料館は観光目的で造られたため、一番疎外されているのが地域の人たちです。でもここには、地域の人々のアイデンティや生活文化が凝縮されているので、何とかその意識を変えていかなければならないと思っています。それによって、貴重な資料が散逸するのを食い止めたいと思っているのです。

馬路村で行なったのは、「村の人みんなで掃除をする」活動でした。1日かけても一部しか掃除できませんが、地域おこし協力隊のメンバーが掃除をイベント化しており、年3～4回掃除しています。掃除をしていると「これはどう使われていたのか？」という話が出てきて、いろいろ盛り上がるのです。これを映像資料に撮りためています。

今日はアクセシビリティの話でしたが、郷土資料館の取り組みは、「これまで地域の人にひらかれていなかった場所を、いかにしてひらいていくか」を考えていくことなので、美術館をひらいていく話とリンクするところもある気がしています。ありがとうございました。

## ［質疑応答］

奥山：数年前から『感覚をひらく』関連の図録などの資料をみずのき美術館にもご提供いただくようになっていまして、「どなたが、どう作っているだろう？」とずっと気になっていて、毎回ワクワクしながら拝見していました。今日のお話でこれまでの活動の裏にあるテーマや想いをお伺いできて、なるほどと思いました。最初に鈴木さんがおっしゃっていましたが、「活動の筋が通る（筋を通す）」ことは、戦略的に実施するのが意外と難しいと思うのですが、きちんと軸が通っていると、1年後に受け取った資料からも「ああ、皆さんは今年こんな活動をされていたのだな」という風に、館の姿勢が自然とにじみ出て来るように思います。同時にその活動だけではなく、日常の学芸員さんたちの姿勢、仕事に対する意識も見えてくる気がします。資料そのものの内容はもちろん、「美術館としての姿勢」を感じられる意味でも、とてもよいインフォメーションになっていると感じました。

長津：ほかの美術館さんでもこうした活動をされているのでしょうか？

本橋：他館と比べたら、当館の活動は後発です。こうした企画を20～30年前からやっていらっしゃる美術館もあります。また、もともと当館は他館とのつながりが薄かったので、第1回目のフォーラムは、先行されている他館との関係づくりから始めたいと思い、兵庫県立美術館さんと岡山県立美術館さんに来ていただきました。例えば、兵庫県美さんは毎年必ず「さわる展示」企画をされているんです。また、『感覚をひらく』シリーズでは、イベントと同じくらいフォーラムを大切にしています。フォーラムは研究会みたいな位置付けですが、今では多くの他館の学芸員さんが足を運んでくださるようになりました。今年の2月7日～9日は、3日間の美術館オープンデー「ひらきまつり！」と題して、ワークショップとフォーラム（トークセッ

ション）を3日間ひたすらやり続けました。ワークショップとフォーラムは必ずセットにしています。おかげさまでフォーラムでは、東京から九州まで20人くらいの方が見学に来てくださいました。まとめると、僕たちは後発組なので1年目はいろんなところに挨拶をしながら、勉強をしながらスタートしました。今はようやく、いろんな施設とのつながりができてきたところです。

## 【第2部 みんなでロームシアター京都の課題を考える】

### トライアンドエラーの過程をプロジェクトに組み込んでいく

河本（ロームシアター京都）：今日はありがとうございました。お三方のお話を伺って、たくさんのヒントをいただくことができました。新しいアイデアや企画の萌芽もいろいろイメージできたように思います。

まずは、今日の感想からお伝えしたいのですが、鈴木さんのお話からは「職員としての心持ちをどう持つべきか？」という課題をいただいたと思います。「私たちはロームシアター京都を支えている一員だ」と思う気持ちがあると、お互いのコミュニケーションの近道になるのだろうと思いました。当館は3ホールあり、一番大きなホールは2000人を収容できる規模のため、3階の事務所スタッフだけではなく、技術スタッフやホール案内係、清掃係、警備員など、かなりの大人数が関わって運営をしています。当館は開館5年になりますが、各自の状況、専門性がまったく違う中で、共通意識やモチベーションを持つための試みや、さらにその意識を高い位置で維持するための働きかけは、あまりできていなかったように思います。これから、そうした働きかけを考えていく上で、吉野さんがお話されたPLATのワークショップ（を通じたスタッフの意識変化）は、良い先行事例になると思いました。

吉野さんのお話では、「みんなとはどういう人なのか？」という問いかけてくださいましたが、これはとても大事な問いだと思います。「障害」という言葉の中にも、目の見えない、耳の聴こえない、身体が不自由など、さまざまな特性があると思うのですが、今年の4月から「いっせいのーで」と一度に取り組むことは到底無理ですので、どこから始めるべきか？を丁寧に考えていくべきだと感じました。

また、本橋さんが『感覚をひらく』ワークショップの紹介で、「障害のある人をターゲットに始めたのではなく、あくまでユニバーサルな視点で〝新しい鑑賞プログラム〟を作ろうとしている」とおっしゃっていましたが、その視点は非常に大切だと感じました。当館では今後、障害のある人に向けた企画を考える予定のため、ついその方たちの特性ばかりを考えてしまいがちです。しかし、それ以前に「劇場としてやっていくべきこと（やっていきたいこと）」が土台にあって、その上で「私たちの企画を見に来てくれる人たちには、どんな方がいるのか？」考えていく視点を忘れずにいたいと思いました。

長津：鈴木さんの話は「例えば、清掃のおじさんをどう巻き込んでいくか？」、吉野さんのお話は「どこから一歩を踏み出すか？」。それから本橋さんの話は「新しい美術鑑賞スタイルとは？」という問いではありますが、全体の2～3割が自主企画であり、そのコンテンツは世界水準で、かなり質が高いものであるというロームシアター京都の独自性をふまえた時に、「一体どのようにして、多様な鑑賞法をひらいていけばいいのだろうか？」という問いだったと思います。

鈴木：僕は、本橋さんの活動が「トライアンドエラー」ベースになっているのが、すごくいいなあと思いました。一般向けの展覧会や舞台公演の本番で、トライアンドエラーを受け入れるのは厳しい。日によって上演内容が全然違う可能性があるので、作品としての質を担保できなくなってしまいますから。でも、ワークショップやフォーラムなら、もっと自由に動ける。そもそもアクセシビリティや、場所やひとに関することに正解はないと思うんです。今年このイベントの評判が良かったからって、5年後に同じことをやって同じ反応を得られる確証はない。5年間通じるものを作る必要はなくて、「今、通じるものが何か？」と考えてまずはやってみる。うまくいったらその理由を、失敗ならばどの観点で失敗だったのかをきちんと検証し、記録していく。こうしたトライアンドエラーを組織の内側にしっかり取り込んでおけば、「あのときって、なんでうまくいかなかったの？」と誰でも聞ける環境になって、次が動きやすくなると思うんです。当たり前のことかもしれませんがが、インクルーシブなプログラムを作るときには、最初から「トライアンドエラー」のプロセスも織り込まれているべきだと思うんですね。

本橋さんにお聞きしたいのですが、京都国立近代美術館さんでは、事前にそういう、トライアンドエラーの考え方について話し合いがあったのですか？

本橋：『感覚をひらく』プロジェクトは、館の独自事業でなくて別予算がついているんです。美術館の運営は、あくまで定期的に行う展覧会がベースになっているので、この事業でミスしても本体の運営にまったく支障がありません（笑）。文化庁から予算をいただいているので、あまり偉そうなことは言えませんが…。とにかく、毎年自分たちでやりたいことを企画して進めているので、あまり失敗がこわくないんですね（笑）。このプログラムは3人の担当者で実施していますが、最初は館の誰も関わってこず、見向きもされませんでした。「僕らが勝手にやっている」という認識だったと思います。当時はとても残念でしたが、続けていくうちに外からの評価が高まると、周囲の態度ががらっと変わるんですね。公共施設は外からの評価にめちゃめちゃ弱いですから（笑）。それで館長以下、他の学芸員たちも少しずつみんなが関わるようになってきました。

ローム シアター京都の担当者さんにお聞きしてみたいのは、この企画は、館の中心メンバーがされているのでしょうか？ それとも一部の尖った人たちがやっているのでしょうか？ それによって、周囲への広がり方が変わってくる気がします。

小倉（ローム シアター京都）：この事業は、劇場の自主事業のひとつで、事業企画のスタッフが中心になって進めています。もちろん進めていく中で、事業スタッフだけでは難しいので、貸館部門の河本さんにも声をかけて、できるだけ広く巻き込んでいこうとしているところです。ただし、警備や清掃、技術スタッフまでは、まだまだこの取り組みを周知できていないと思います。警備と清掃は業務委託をしているので、なおさらですね。事務所の事務系職員ですら、シフト制なので全員揃うのはまずないです。劇場のスタッフ全員が集まる機会は、年に一度の避難訓練くらいです。ですので、その機会に話をしてもいいのかなと思いました。

自主事業チームの中でも、今日参加しているプロジェクトメンバーしか、まだ具体的な内容を知りません。現在は、宮崎さんが中心となって、奥山さんや他のメンバーと一緒に、地域の関係者の話を聞きにいっている最中ですが、その活動の共有もまだできていないですね。ひとまず、来年度（2020年4月）から、公演チラシに音声コードをつけていく予定ですので、そのあたりが最初の試みになると思います。でも「それを本当に必要としてくれている人がいるか？」という議論はまだできていません。そもそもチラシは、普段からできるだけ情報をしぼってデザインをしているので、情報を追加していくことへの異議が上がる可能性もあります。もちろん、音声コードを作ることで追加予算もかかるので、足並みを揃えて実施するにはもう一声必要かもしれません。

奥山：「地域に話を聞きにいく」という話が出ましたが、現在は宮崎さんや河本さんと一緒に、地域の社会福祉協議会や、大阪のビッグ・アイさん（国際障害者交流センター）、障害がある個人として表現活動をされている光島貴之さんなどにお話を聞きにいっています。

宮崎麻（ローム シアター京都）：話を聞きにいった後のシェアの仕方が難しいと感じています。議事録にまとめてはいますが、ただメールで送るだけでは埋もれていきます。

長津：まさに今の話は、吉野さんがお話くださったジェニーさんの発言「手話通訳を入れることは答えではない」につきますね。音声コードを入れることがゴールではないし、入れただけで何も変わらないという話。でもどうすればいいわからないから、そこから始めるという気持ちもわかります。

## 「あせってもいい」を許容できる環境づくり

吉野：今の話でいうと、いっぺんにすべてに対してひらくのは、どの劇場も無理なんです。PLATだってまだ全部はできていない。その中で「何から始めるか？」を決めるのは、「自分たちがどんな劇場でありたいか？」にリンクしていると思います。例えば、うちは周りに学校が多いので、子どもや若い人たちに来てほしいと考えて事業を組み立ててみる。その視点から地域を見渡してみたら「近所にこういう養護学校がある！」とか「他にもこんな学校がある！」とかがわかってきます。まずは地域のご縁からつないでいくのがいいと思います。本橋さんが鑑賞プログラムを作ったプロセスと同じで、障害者うんぬんではなく、やりたいことを実施する中にインクルーシブな企画がひとつある、という考え方でいいと思います。どんな劇場にしたいのか？ じゃあどこから？ 誰から？ という風に自ずと順番が見えてくる。丁寧に向き合っていれば、いいご縁がふっと浮かび上がってくると思いますよ。

鑑賞支援についても調べれば調べるほど、手話通訳、タブレット、字幕などいろいろあって迷うと思いますが、例えば「3つだけ手始めに」と決めて、何を優先するのが自分たちのお客さんにはいいのかを考えていけばいいんです。少しずつトライアンドエラーではじめてみることが大切です。例えば、いくつかの施設に協力をあおいで（例えば、養護学校の生徒さんや、学校の特別支援担当の人など）に実際体験してもらって、「もう少しこうした方がいい」とか、「ここを変えれば、もっと楽しめる」などのフィードバックをもらって、蓄積していく…。これらを積み重ねていけば、だんだんとできることも増えるし、彼らとのネットワークも広がっていく。

大規模な公演で試すのではなく、トライアンドエラーを繰り返せる小規模で実験しながら進めるのがいいと思います。少し長期的な視野で段階を踏んでいけばよくて、最初から完璧である必要はないんです。むしろ、「ここが足りない」「これはしないほうがいいよ」と教えてもらう機会をあらかじめ作っておく方が、ハードルが上がらなくて現実的だと思います。

それから本橋さんがおっしゃった「お手紙」という考え方も、とてもいいなあと思いました。PLATのジェニーさんのワークショップの際、劇場の人からチラシの草案について相談されたんですね。すると、劇場で初めて多様な人たちを巻き込んでいく企画であるにも関わらず、「劇場としてどんな対応できるか（トイレのこと、手話通訳など）」という一番大切なことが、裏面に小さく書かれているだけだった。わたしは「これを劇場からのメッセージとして、一番見やすい表面に出してください」とお願いしました。たとえ、今回は一人も耳の聞こえない人の申し込みがないかもしれなくても、「当日は手話通訳をつけます」とか、自分たちの姿勢を明確にした方がいいと思ったので

す。先ほどチラシの音声コードの話が出ましたが、これをつけたからって、目の見えない人の利用が急に増えるわけではないし、それを期待してはいけないと思う。大切なのは「私たちの視線は、いつも皆さんに向いているんですよ」というお手紙の発信だと思う。ぶれずに、継続して発信し続けていくことで、いつか本当にそのお手紙を読んでくれる人が増えていくのではないでしょうか。

鈴木：実際に劇場に足を運ばなくても、そのお手紙を受け取って読んでいる人がいる、という考えですね！

本橋：今ロームシアター京都が実施しているコンテンツで、「誰でも、十分に楽しめている」と思ってみたらいいのではないでしょうか？ 障害によっていろんな制限があるから、そもそも他の人と同じ鑑賞法は無理なのです。冷たい言い方になるかもしれませんが…。でもその人たちは、その人たちの楽しみをちゃんと見つけていらっしゃるんです。ごくたまにですが、目の見えない方から館内の案内を頼まれることがあります。普段の展示は目の見えない人が楽しめる仕掛けは一切していないんです。でも一緒に回って「ここにはこんな作品がかかってます、あれはあんな作品です」と丁寧に解説すると、すごく満足して帰っていかれるんです。彼らには「今あるものを楽しもうとする」（ポジティブな）態度があるので、あまり「何かをしてあげなければならない」と強く考えすぎない方がいいと思います。先ほども言いましたが「誰でも来ていい」という状態で場所をひらいておく。もし実際、障害のある人がたくさん来られたら、その時あせればいいんです（笑）。同行している手話通訳の方が助けてくれるだろうし、目の見えない人に関していえば、僕らはただ求められた手引きをしてあげればいい。もちろん、目の見えない人も楽しめる工夫をオプショナルで提供できればなお良いですが、まずはできることからやればいい。

鈴木：職員さんに対して「あせってもいいよ」というルールにすればいいと思うんですよね（笑）。お客さんに対して「わからないから、教えてください」という姿勢でもいいのではないかと。僕らはどこかで「決まったサービスを提供しなくちゃ」と思い込んでいるけれど、普通の対応とちょっとずれている方が、またはあせっていたり、喜んでいる時の方が、その人らしい個性を感じられる気がする（笑）。それで怒り出す人は、固定化されたサービスを求めている人たちなので、それは粛々と提供すればいい。そういう人への対応は、十分もう慣れているはずでしょう？

もうひとつ提案を。「スタッフの顔が見える」ことが親近感の表れであるならば、「スタッフによる（お客さんの）えこひいきの投書箱」を作ってもいいのではないかと思いました。「いつもあそこに座っているおじさんは、いつも新聞を読みづらそうにしています。だから、ルーペを設置してあげたい」みたいな感じですね。スタッフのみなさんが普段目撃する来場者や、公園で遊んでいる人たちがどんな人たちなのかを観察して、その人たちに対して何ができるか考えてみるのもいいかもしれない。僕がたまたまさっき目撃したのは、外階段の下からお父さんがボールを投げ、子どもがボールを取り損ねて、ボールがガラスにぶつかっていた（柔らかいボールだったから、何も問題はなかったけれど）。それを見て、その遊びがより楽しくふくらむことを考えていました。意識してみたら、すでにたくさんの人がここには出入りしているなぁと思いました。だから、その人たちの過ごし方を目撃した職員さんたちが、「あのお客さんの、この部分をこうしてあげたい」という、アイデアを出しあったらいいのではないかなと。その投書の中から、アクセシビリティに関する館の方針にしたがって、どれをやるかを選別していけばいいのではないでしょうか。

## 鑑賞支援にとどまらない、クリエイティブな舞台鑑賞とは？

吉野：本橋さんがおっしゃった「今のままで十分面白い」という視点に賛成ですね。この対応が行き過ぎると、愛知の劇場で起きたクレームと同じことになると思うんです。ネットなどでも話題になったのでご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、こんな出来事がありました。クラシックコンサートに毎回来られている、目の見えない常連さんがいらっしゃるのですが、ある日、たまたまその事情を知らない劇場スタッフが対応した時に、なぜか「危ない」からとその方を車椅子に乗せてしまったんですね。お客さんは自分で歩けるから、案内だけをお願いしたかったのに、過剰な上に間違った対応をされたことでクレームになってしまったのです。「こういう人に対しては、こうしないといけない」という風に対応をマニュアル化すると、目の前にいる本人としっかり向き合えなくなると思いました。他にもよくあるのが、外国人のお客さんに「メイアイヘルプユー？」と話しかけたものの、「いえいえ、京都には15年住んでいますので」と日本語で返される展開（笑）。先ほど、「どんな人に来てほしいかを考えることが大事」と話しましたが、一方で「どんな人」かというイメージを勝手に固め過ぎない方がいいですね。

それからもうひとつ、本橋さんがおっしゃっていた「新しい美術鑑賞」の考え方もいいですね。これを劇場に置き換えて、「新しい舞台芸術鑑賞」を考えたらいいと思いました。この中には副次的な「鑑賞支援」という発想も入ると思います。最近日本でも定着してきたもので、解説や手話通訳などで鑑賞をサポートすることで「劇場を行きやすい場所」として整備していく試みですね。それはそれで大事ですが、同時に「劇場は、クリエイティブな創造の場」だと考えた時に、まったく新しい舞台芸術鑑賞の方法を模索してみるのもいいと思う。そのことによって、舞台作品の新しい面白さや演出法がみつかるかもしれません。

先ほどジェニーさんの活動を紹介しましたが、彼女は正にそういう視点でクリエーションしています。イギリスでは、ほとんどの劇場で、各公演の上演回数のうち何割かに舞台手話通訳がつきます。でも、当事者の彼女としては、それですら「自分にとっての見やすさではない」と言っています。なぜ、素敵なラブシーンの最中なのに、舞台中央の演技と舞台端の手話通訳に同時に目をやらなければならないのか？と。そうではなく、「手話通訳も舞台の中に入り込んで、すべての情報が同時にわかるようにできるのではないか？」という考えのもと、断片的でも、みんながいろんな角度から鑑賞そのものを楽しめる作品をつくろうとしています。

彼女の舞台では、手話通訳が俳優の一人のように舞台中央で役者と一緒にいることもあれば、視覚的な情報を音や台詞の中の言葉で伝える仕掛けや感覚的に伝える工夫をしていることもあります。ありとあらゆる「新しい舞台鑑賞法」を発明しているのです。ロームシアター京都でも、クリエイティブなアプローチとして、こうした新しい舞台鑑賞のあり方を実験してみてはいかがでしょうか？ そのプロセスやトライアンドエラーを、事業計画の中に入れ込んだら面白いのではないかと思います。障害のないアーティストたちにとっても、最近はいろんなことにチャレンジしている障害のあるアーティストにとっても、お互いによい刺激になると思います。特に関西は、こうした試みを行っている人が集中しているので、きっと実現できると思います。

小倉：今年度、耳の不自由なダンサーである南村千里さんに高校生向けのワークショップを担当いただきました。南村さんのこれまでの作品には、「お客さんひとりひとりが振動を感じる装置をつけて鑑賞する」という手法があるそうで、興味深いなあと思います。

宮崎麻：「誰にとっても新しいこと」をやってみたいですね！何度も言いますが、ロームシアター京都では世界水準の作品が見られる場所。京都にいながら、世界の最先端の舞台芸術が見られるのです。だからこそ、コアなファンだけでなく、いろんな人にひらかれているといいな思います。

## アクセシビリティを「チケット料金」から考える

小倉：できるだけ多様なお客さんに来てほしいと思う反面、興行という面がある劇場では、チケット料金の高さが、もしかしたら劇場のアクセシビリティにおける一番のバリアになっているかもしれません。ロームシアター京都は開館時から、障害のある人向けの料金を作っていないんです。そのあたりも含めて、再考していく必要があると思います。

長津：なぜ、ロームシアター京都には障害者料金がないのでしょうか？

河本：主催事業は、介助の方は無料です。車椅子の方は、見る場所が固定されてしまう制限があるので1割引になります。

奥山：イギリスはどうなのでしょうか？

吉野：最近の事情はわかりませんが、「コンセッション料金（concession）」という割引制度が以前からありますね。学生や年金暮らしの人、失業者などに向けたもので、障害者もここに含まれていたと思います。劇場に行けない理由のひとつに収入の問題があるので、この制度は非常にわかりやすいと思います。その意味で、収入の多い障害者が対象になるかならないかは、私にはわかりません。イギリスの国立劇場等のサイトを見ていただくといろいろ分かると思います。ちなみに、障害のある人の社会保障のあり方が国によってまったく違うので、他国の状況と一概に比べることはできないということもお伝えしておきたいと思います。日本は就労支援が非常に少なく、障害者年金で生活をサポートする仕組みですし。齋藤さん、いかがですか？

齋藤：そうですね、イギリスでは障害者割引はコンセッションに含まれていたように思います。とはいえ、毎回彼らが日本でいう障害者手帳のようなものを見せていた記憶があまりないのですが。

小倉：PLATのジェニーさんのワークショップでは、割引料金を設定されたのですか？

吉野：PLATは豊橋市の補助金事業なので、そもそも料金設定が安いんです。ジェニーさんのワークショップは単発1000円、3回3000円でした。また、このワークショップは元々「多様な人が集まって一緒に作る」ことがテーマだったので、金額は一律設定でした。もちろん、介助の方は無料にしています。

小倉：私たちが今後、障害者向けの公演やワークショップを考える時、企画内容に合わせて料金も丁寧に設定した方がいいかもしれませんね。普段のロームシアター京都のチケットは4000～5000円。舞台作品の価格としては適正ですが、高く感じられるかもしれません。

長津：これは、「なぜ割引があるのか？」という根本の話にもつながりますね。障害者、年金生活者、生活保護者など、対象者によって値下げのロジックが違うと思うんです。学生割引は、彼らの収入が低いという理由もありますが、「若いうちにいろんなものにふれてほしい」という教育的側面、青田買い的な側面もある。シニアに対しては、「もっと劇場に来てもいいですよ、公演も見に来てほしいし、ご家族にも紹介してくださいね」みたいなロジックがあると思うんです。いずれにせよ、先ほど鈴木さんがおっしゃった「あの人のあれを、こうしてあげたい」という想いがすべてだと思う。自分たちのポリシーと照らし合わせた上で、「障害者割引をする／しない」の線引きをしていけばいいのかと思います。

吉野：「どうして割引するの？」は「誰に来てほしいの？」という問いとつながると思います。この人が来やすいようするにはいくらに設定すればいいのか？ みたいに。先ほど、観劇はしないけどロビーで新聞を読んでいるおじさんの例がありましたが、この人が年金暮らしだとしたら、どうでしょうか。簡単には来られないですよね。個人的な話ですが、美術館や音楽会に行くのが大好きな私の母も、最近は年金暮らしの不安から、「あまり芸術鑑賞には行けない」といっています。こんな話を記録に残していいのかわかりませんが…。母は今80歳を越えていますが、100歳時代が迫っている今、今後もさらに長生きするとしたらそこまで考えておかなくてはならないと。「いろいろ貯めておかないと不安だし、夫が亡くなったらもっと不安は増える。周りに迷惑をかけたくない」と少し神経質になっています。芸術好きな母の生活から、芸術が遠のいている現状は、きっと多

くの高齢者に起きていると思うんですね。例えば、みなさんがそういう人たちに客席にいてほしいと思うならどうするか？ という話のような気がします。

それから舞台芸術の特性を理解することも大切です。美術鑑賞とは違って、劇場では「勝手な時間に出入りしない」というルールがある。みんなが同じ客席で、同じ時間滞在しなければならないので、多様な客席になった場合に、お客さん同士のちょっとした衝突が起こりうるかもしれません。特に、知的障害のある人が入る客席では多いかもしれない…。これに対して、ちょっとでも我慢できないお客さんがいたらそこをどうするのか？ もし「うちの劇場は、それも含めて多様な人たちに同じ時間を共有してもらうことが劇場体験です」と打ち出すなら、それを周知するために何をすればいいのか？ 考えることはいろいろありますね。

先日参加したシンポジウムでミューザ川崎シンフォニーホールという音楽ホールの話を聞きました。最近は、広くひらいたプログラムをトライアンドエラーで実施しているそうです。しかしその一方で、音楽ホールでは最近、「隣の客が咳一つするのが嫌だ」「プログラムをめくる音すらも嫌だ」と言ってくる不寛容なお客さんが増えているらしいのです。そんな時代において、「いろんな人が共存する劇場」を提案する意味は、非常に大きいと思いますね。

鈴木：プログラム1ページをめくるごとにクレームをつけてくる人を「ほっておけ」とするのか、「そこにも対応していきます」とするのか？ 劇場の姿勢をしっかり明確にしていったほうがいいと思います。公共施設であればあるほど、館の立場が弱くなる可能性はあるから、ある程度逃げ道を作っておいた方がいいかもしれませんね。

今思いつきで考えたのは、「寛容できるか、できないか」をお客さん自身に委ねる仕組みを作れないだろうかと。僕もちらっと聞いたことがあるだけでうろ覚えですが「TABLE FOR TWO（2人のための食卓）」という社会活動をご存じでしょうか？ 自分が食事をしたときにもう一食分、誰かの食事代も一緒に払っていく試みです。決して一緒に食べるわけではなく、支払いのみをカバーします（註：TABLE FOR TWOは、社員食堂や学校の学食、店舗などで、TABLE FOR TWO対応メニューを購入すると、代金の内20円が寄付となり、アフリカの子どもに給食1食分をプレゼントできるという取り組み。NPO法人TABLE FOR TWO International が実施）。これって、例えばすごくいい映画や演劇を見た時に、「コレ知らないの？マニアックだけどすごくいい。自分が払うから一緒に行こうよ！」みたいなテンションで友人を誘う感じに似ていると思うんです。または、先輩が後輩を誘ってあげる感覚というか。

これをロームシアター京都でやってみたらどうでしょうか？「すごくいい舞台だったから、私がもう1席分払っていきます」という感じで。しかもそのチケットの利用者を、送り主がある程度選べるようにしてはどうでしょうか。「小学生に贈りたい」とか「知的障害のある人へ贈りたい」とか…。一方で、劇場の人が、献血みたいに「実は最近、小学生向けが多いので○○はどうでしょう？」みたいに提案したり（笑）。一方で、「何月何日の公演は、TABLE FOR TWO公演です」と事前にアナウンスしておけば、多様な人と一緒に見るのが嫌な人は、そこを外せばいい。選別されている席は、ちょっと料金が高くてもいいのかもしれませんし。逆に、多様な人がいる客席の方を値引いてもいい。まあ、「環境を整えるにはお金がかかるね」という話なのですが。

奥山：素敵ですね！ ロームシアター京都でもぜひやってほしいですね。

小倉：三浦基さんが京都で主宰する劇団地点の劇場「アンダースロー」では、似たような取り組みをされていますよ。「カルチベートチケット」というのですが、公演を見た人が、若者や劇場に来にくい人のためにプラスでチケットを購入してプールしていく仕組みです。この仕組みが素晴らしいということで、参考にしてそのシステムを取り入れたのが「フェスティバル／トーキョー」という舞台芸術祭。これをさらに進化させて、送り先を指定する鈴木さんのアイデアも面白いですよね。

鈴木：送る相手を指定する時に、受付の人と会話のやりとりが生まれるのもいいなと思う。そんなに買ってくれる人はいないかもしれないけれど、少ない分、しっかり話ができるかもしれません。

小倉：同じ話の流れで、企業から協賛を集めて席を確保するのはどうか、という話が出たこともありました。

吉野：イギリスではすでに行われていますね。「スポンサードシート」といって、企業やパトロンが買い取った座席に、貧困地区の子どもたちを招待するなどの活動が行われています。

小倉：当館にはサポーター会員制度もあるのですが、それと絡めてもいいのかもしれません。

吉野：いいですね。特に児童養護施設さんは、劇場に行ける機会が本当に少ないですからね。

鈴木：友人と冗談半分で話したことがあるのですが、協賛相手を探す時に、マイケル・ジャクソンのような人に手紙を書いてみたらどうか？ いっそビル・ゲイツはどうか？と（笑）。もちろん送る相手は、その企画に興味を持ってくれそうな人を丁寧に選ぶ必要がありますが。単なるお金目当ての手紙を書いても響かないけれど、響きそうな相手の気持ちを慮って書けば、数打てば当たるかもしれませんよ（笑）。発想は助成金と一緒ですからね。

## 第2部のまとめ

長津：本橋さんの「来てしまってから、あせればいい」というのは、個人的にかなり好きです。職員の側も、お客さんの側もそうだと思うんです。お客さん側も「あれ、これって来て良かったの？」という状況に直面することがあると思いますし。それから、鈴木さんの「あの人のあれを、こうしてあげたい」という提案もいいですし、一方でこれを受けた吉野さんの「逆に、〝こ

ういう人だからこうだよね〟と決めつけると、目の前にいる本人と向き合えなくなってしまう」という指摘もなるほどと思いました。

あまり話題に出なかったのは、社員研修でしょうか。僕は福岡市の［ももち文化センター］から依頼されて社員研修に行ったことがあるのですが、朝に全社員で避難訓練をやった後、マナー接遇講座を行い、最後に社会包摂事業の紹介として私が話をしました。

奥山：全社員が集まる避難訓練を社員研修の場にするのは、ロームシアター京都でも検討できそうですね。

吉野：全社員で一斉研修を受けて共通理解のベースを作ることも大事だと思うのですが、小さなワーキンググループでいろんなトライアンドエラーを繰り返してみるのもいいと思います。例えば、各部署から一人ずつ、いろんな専門性がある人たちによる小グループを作って、みんなが順番にちょっとずつインクルーシブなプロジェクトを経験してみるのもいいと思う。うまくいく班もそうでない班もあると思いますが、経験をうまく共有しあったらいいのではないかと思いました。専門的なグループで事を進めていても、なかなか全体への情報共有は難しいと思うので、実際に体験してもらうことが理解を促す近道になるかもしれません。

長津：部署の枠組みを越えて意見交換していくのは、とてもいいと思います。先日、北九州芸術劇場のイベントで講演をしたのですが、その時に技術担当の人が「親子室に質のいいスピーカーを1本立てるだけで、一気に音環境が変わる」と話していました。それを聞いた事業担当の人は「へえ、そんなことができるんだ」と驚いていましたが、私自身としては、トライアンドエラーの一環として試してみる価値はあると思いました。実際の親子室はさほど広くはないけれど、本当に環境が変わるかもしれないですし。こういうことって、今いる部署の中だけで話していたら絶対出てこないアイデアですよね。組織を横断して話をしていくことで生まれていく発想だと思います。

吉野：私自身は、年をとってきた両親がいて、自分も昨年初めて骨折をしたことでアクセシビリティを体感するきっかけになり、少しですが「みんなの」が具体的に想像できるようになりました。ロームシアター京都はかなり大きな劇場なので、私のように、各職員の両親や祖父母、兄弟、友人まで対象を広げたら、「多様な客席」の当事者に近い人が多少はいるような気がします。部署を越えて話をしてみると、きっとそういうことが他人事ではないものとして、主観的にとらえるきっかけになるのではないかなと思いました。「顔が見える劇場」づくりの一歩にもなるかもしれません。

鈴木：劇場の予算に研修費があるのかわからないのですが、もし研修費があるなら、避難訓練から形を変えていくのもいいかもしれません。避難訓練で避難するメンバーにサクラとして、多様な背景を持つ関係者に入ってもらうこともできると思います。または、吉野さんがおっしゃっていたように、自分自身の持っている視点を一度浮き彫りにするのもいいと思います。「自分は、こういう親の介護をしています」「肢体不自由の兄弟がいます」「ケガをして、松葉杖の経験あり」など、それぞれが具体的な視点をもった上で他部署の話を聞きにいって、何ができるかを考えてみるのもいいのではないかと思います。

長津：「今あるスキームを、インクルーシブな視点で見直す（捉え直す）」という提案ですね。

奥山：今日は公開勉強会にしたかったですね。今日はもともと、TA-netさんの元副理事の方（ろう者の方）もお見えになる予定でしたし、前回は障害を持ちながらアーティスト活動をされている光島貴之さんも来られる予定でした。これによって、劇場の皆さんと当事者の方が会えるきっかけを作れたはずなのですが…。ロームシアター京都のメンバーが、「今日はこの人と会えたから、ぜひあの企画をやってみよう！」と、さらなる一歩のために奮起するきっかけが生まれていたはずだと思うと、あらためて残念だと思いました。今日は実施できませんでしたが、今後の当事者の方たちとの出会いを楽しみにしながら新事業を企画していけたらいいですね。

長津：本橋さんもおっしゃっていましたが、事業を作ることと、フォーラムなどで振り返りの場、語りの場の時間を作っていくことも大切だと思いますね。

宮崎麻：日々の業務を行なっていると、いろんな仕事に追われてしまって「会いたい」と思っていても、なかなか自分から出会いにいくことが難しくなってしまいます…。でも、「出会っていきたい」という心持ちをしっかり持ち続けたいですし、さらには、いろんな方と自然に出会っていけるシステムを作っていけたらいいなと思いました。スタッフみんなが同じ意識を持ち続けると心強いなと感じました。

長津・奥山：皆さん、本日はありがとうございました。

※一部編集の上掲載しております。